

# 阪神大水害から80年の取り組みについて ～個人の記憶を社会の記憶に～

近藤 浩明<sup>1</sup>・矢野 治<sup>2</sup>

<sup>1</sup>近畿地方整備局 六甲砂防事務所 (〒658-0052兵庫県神戸市東灘区住吉東町3-13-15)

<sup>2</sup>近畿地方整備局 六甲砂防事務所 調査課 (〒658-0052兵庫県神戸市東灘区住吉東町3-13-15)

平成30年は、神戸市など六甲山地周辺で死者・行方不明者約700名、被害家屋数約12万戸という甚大な被害をもたらした昭和13年7月「阪神大水害」から80年となる年であった。文豪、谷崎潤一郎の代表作「細雪」にもその状況が描かれ、六甲山地の砂防事業直轄化の契機ともなった災害であるが、時間の経過とともに体験者も減少し、その教訓も薄れようとしている。

土砂災害の発生が急増している昨今、過去の災害から学び、自らの生命・財産を守る術を身につけることが喫緊の課題となっていることから、阪神大水害の記録・記憶を次世代へ継承していくことを目的に行った取り組み事例を報告する。

キーワード 阪神大水害, 土砂災害, 防災教育, デジタルアーカイブ

## 1. はじめに

昭和13年7月、神戸市など六甲山地周辺で死者・行方不明者約700名、被害家屋数約12万戸という甚大な被害をもたらした「阪神大水害」が発生した。被害の状況は文豪、谷崎潤一郎の代表作「細雪」にも描かれている。

阪神大水害では土石流が数多く発生し、砂防事業を重点的に進めていく必要が生じたことから直轄化され、六甲砂防事務所が発足した。その後、砂防堰堤等整備を進めており、昭和42年の災害以降、六甲山周辺では大きな土砂災害は発生していない。

約50年の間、大きな土砂災害が発生していないことは幸いであるが、一方で、住民の危機意識も希薄となってしまっている。

「阪神大水害から80年を迎えるに当たり、過去の災害を知っていただくことで、住民の防災意識が変えられたいだろうか」という発想が、今回実施した「阪神大水害から80年」の取り組み(以下、「本取り組み」という。)の出発点となった。

## 2. 阪神大水害とは

### (1)降雨の概要

昭和13年6月下旬に、本州南方に発生した台風は、南東及び東方海上を通過し、関東・東海道の豪雨をもたらした。東海道本線も10数箇所不通となった。この台風の通過後、シベリアから日本海を覆う高気圧と、南方小笠

原島方面の高気圧の間に、九州から東海道沖まで本州南海岸に沿う梅雨前線が生成され、これが徐々に北上し、7月3日には瀬戸内海を通過した<sup>1)</sup>。

六甲山地では、3日夕方より雨は勢いを増し、4日夕方に一時おさまったものの、5日深夜から午後まで大豪雨となり、3日間で461.8mmの雨量を記録した<sup>2)</sup>。

### (2)被害の概要

六甲山地を襲った豪雨により、山腹が崩壊。各河川は土石流を伴う大氾濫を起こし、岩石、流木、土砂礫を下流部に押し流して、道路、街区、耕地を埋没させた(写真1参照)。

六甲山地周辺で死者・行方不明者約700名、被害家屋数約12万戸という甚大な被害となり、この豪雨による土砂の流出量は、表六甲だけで500万m<sup>3</sup>から700万m<sup>3</sup>と推定される<sup>2)</sup>。



写真1 昭和13年 都賀川阪急北側付近被災状況

### 3. 本取り組みの目的・方針

#### (1)本取り組みの目的

これまで、過去の災害を次世代等に伝える取り組みとしては、学校等において出前授業の実施、防災イベント時に模型展示等のブース出展、啓発資料の配付などの広報活動を行ってきた。

これらの広報活動は、主に被災写真や映像を用いており、六甲山地の過去の災害の断片的な事例として一定の認識を得られた一方、過去の災害の1つとの認識に留まり、参加者自身が居住する地域で起こり得るとの発想までには至らず、自分のこととして将来の災害に備えることができないという課題があった。

また、従来の広報活動では一度に伝えられる人数にも限界があり、様々な年代に幅広く伝えていくことも課題であった。

上記の課題を解決し、阪神大水害という過去の悲惨な経験を学び、より多くの人が自分自身のこととして防災を考える「防災意識の高い社会」の構築を目指すことを目的として本取り組みを行った。

#### (2)阪神大水害に関する「情報等」の状況

阪神大水害から80年が経過した現在、阪神大水害を直接経験した方は少なくなり、様々な記録や資料（以下、「情報等」という。）も時間の経過とともに散逸し、過去の災害経験の伝承は先細っていく状況にあった。また、各行政機関を始め、関係機関が保有している情報等も何処にどの様なものがあるのか、横断的な情報共有はなされておらず、阪神大水害のことを知りたいと思っても大変な労力をかけ一つ一つの情報を集める必要があった。

#### (3)本取り組みの方針

関係機関が保有する情報等の集約、新たな情報等の発掘、過去の災害経験の伝承方法の検討等を行うにあたり、阪神大水害80年行事実行委員会を組織し、行政機関として国土交通省六甲砂防事務所、兵庫県、神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市、学識経験者として神戸大学の沖村孝名誉教授、兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科の浦川豪准教授、人と防災未来センターリサーチフェローの坪井壘太郎氏、地元報道機関として神戸新聞社地域総研が参画し、意思決定をしていくこととした（スケジュールは図1のとおり）。

平成30年5月21日に第1回委員会が開催され、活動のスローガンを「～個人の記憶を社会の記憶に～」とし、以下に示す活動についての方針が決定された。

- ①阪神大水害に関する情報等を関係機関にとどまらず、一般市民にも広く呼びかけ掘り起こす。
- ②収集した情報等を電子媒体として整理し、多くの方が利用しやすい形で情報を公開する。
- ③取組については、構成各機関が協力・分担して実施する。

月	日	会議等	活動	情報等	関係機関	実施内容
4月	21日	第1回実行委員会	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
5月	21日	第2回実行委員会	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
6月	1日	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
6月	21日	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
7月	24日	第3回実行委員会	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
8月	1日	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
8月	21日	第4回実行委員会	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
9月	1日	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
9月	21日	第5回実行委員会	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
10月	1日	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
10月	11日	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
10月	14日	第6回実行委員会	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
11月	1日	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
11月	24日(土)	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け
12月	1日	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け	関係機関・市民向け

図1 阪神大水害80年行事スケジュール

### 4. 取り組み内容

#### (1)情報収集の取り組み

a) 関係機関が既に保有している情報の収集

国土交通省六甲砂防事務所、神戸市、西宮市、住吉学園、神戸アーカイブ写真館、神戸市文書館の保有する情報等の収集をおこなった。概ね2,300点の資料を収集し、重複チェック後、1,700点程度に再整理した。

b) 市民からの情報等の提供

5月21日の実行委員会設立後、翌6月から早速広く市民を対象に情報等の募集（図2、図3参照）を開始した。募集にあたっては、兵庫県と4市の広報誌誌面に告知文を掲載するとともに、神戸新聞にも記事を掲載していただき、出来るだけ多くの方の目に触れるよう心がけた。

また、これらの募集活動の開始にあたって、事前に報道機関に情報提供していたところ、多数の報道機関に取り上げていただき、新聞では5紙、テレビでは3局で活動が紹介された。

図2 情報提供を呼びかけるチラシ

さらに、阪神大水害の体験者に募集に関する情報が届くよう、神戸市の協力を得て神戸市内の95歳以上の方を対象としてダイレクトメール（図3参照）の発送を行い情報提供をお願いした。

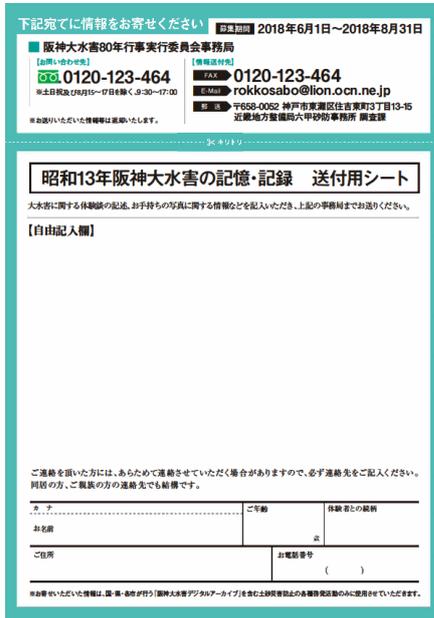


図3 発送したダイレクトメール

その結果、情報等の募集を始めて8月末までの間に約180件の情報提供があった。なお、情報等には写真や書簡（写真2参照）の他、実際に阪神大水害の災害体験をお持ちの方から貴重な当時の体験をお伺いし、体験談として記録した情報（写真3参照）等も含まれている。



写真2 提供された資料の一部



写真3 体験談の収録状況

### c) 座談会の開催・研究活動

六甲山麓は東は宝塚市から西は神戸市須磨区まで広範囲にわたり、地域独自の情報収集や防災意識向上のための活動に特色があるため、各流域ごとに阪神大水害体験者や地域住民などを招いた座談会を実施した（写真4参照）。

また、地元中高生による阪神大水害に関する研究活動を実施し、座談会での発表や更なる情報収集を行い、災害に関する理解を深めることにより、次世代へ災害の記憶を継承し、地域防災力の向上を図った。



写真4 座談会の様子

- ・座談会の開催（8月21日～10月30日）
  - 芦屋川流域
    - 市内自主防災組織等約45名参加
  - 住吉川流域
    - 流域自治会、住吉中学校、一般等約20名参加
  - 都賀川流域
    - 地域協力団体、渚中学校、報道関係者等約20名参加
  - 新生田川・宇治川流域
    - 地域協力団体、渚中学校、報道関係者等約20名参加
  - 新湊川流域
    - 流域自治会、神戸常盤女子高校、一般等約20名参加
- ・研究活動（7月4日～9月11日）
  - 中高生の研究活動に当たっては、まず阪神大水害につ

いて学習を行った後で、どのようなテーマで研究をしていくかを生徒自らが決定し、活動を実施した。

各校の活動内容は以下のとおり。

○住吉中学校

活動者：住吉中学校生徒会有志 13名

内容：当時、住吉川流域の住吉小学校に在籍していた災害体験者にインタビューを実施した。実施にあたっては事前にインタビュー内容の検討を行い、聞きたいことを整理することやインタビュー内容を地図に落とし、位置関係を整理する等、より理解を深める工夫を行った。

○渚中学校Aチーム

活動者：渚中学校防災ジュニアリーダーAチーム 12名

内容：都賀川流域新在家地区の地域住民の方と一緒に都賀川流域の現地調査（まちあるき）を北グループと南グループの2班で行い、災害写真の位置の特定とその場所の現在の写真を撮影した。

写真を地図に落とし込み、被災時と現在の写真が比較できるように整理することで、日頃の生活圏が一度の災害で激変することを学んだ。

○渚中学校Bチーム

活動者：渚中学校防災ジュニアリーダーBチーム 13名

内容：当時、新生田川流域に住んでいた災害体験者の証言映像の確認を行い、実際に災害体験者が被災当日に小学校から帰宅した道のりを歩き、周辺環境などを調査した。

証言を基に当時の状況を疑似体験することで、災害の恐ろしさや地形の違いから、被害の出やすい場所とそうでない場所があることを学び、避難時は地形を考慮すること等に気付いた。

○神戸常盤女子高校

活動者：神戸常盤女子高校生徒会有志 8名

内容：新湊川流域で被害が大きかった長田神社周辺の現地調査を実施し、被災写真の位置の特定とその場所の現在の写真を撮影した。写真を地図に落とし込み、災害時と現在の写真が比較できるように整理した。

研究を行う中で興味を持った周辺の被害状況や土砂の撤去作業について、追加調査として山陽電鉄及び神戸アーカイブ写真館で学んだ。

**(2) デジタルアーカイブの構築**

デジタルアーカイブは、将来にわたって阪神大水害の情報等を保存していくこととともに、誰もが容易に情報

等に触れられる環境を提供することによって、過去の災害が未来に継承され、結果として六甲山地周辺地域の防災力向上に貢献することを目的としたものである。

したがって、デジタルアーカイブは一般の市民が気軽にアクセスでき、小中学校における防災教育にも活用出来るよう、活用しやすい操作性や画面構成が求められる。一方でデジタルアーカイブに保存される情報等は重要かつ貴重なものも多く含まれ、防災の専門家や研究者がそれぞれの活動に利用できる形態も求めたいといった、かなり欲張った仕上がりを目指した。

構築に関しては、専門的な知見を持つ兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科の浦川豪准教授及び研究室の方々が取り組んだ。構築された「阪神大水害デジタルアーカイブ」（写真5、図4参照）は災害体験者へのインタビュー動画・手記・エピソード・中高生による研究活動の様子を掲載する他、位置を特定した写真の掲載にあたっては、現在と災害発生当時の地図を重ね合わせ、状況把握をやすくするなどの工夫が凝らされ、十二分に満足できる仕上がりとなった。



写真5 デジタルアーカイブトップ画面

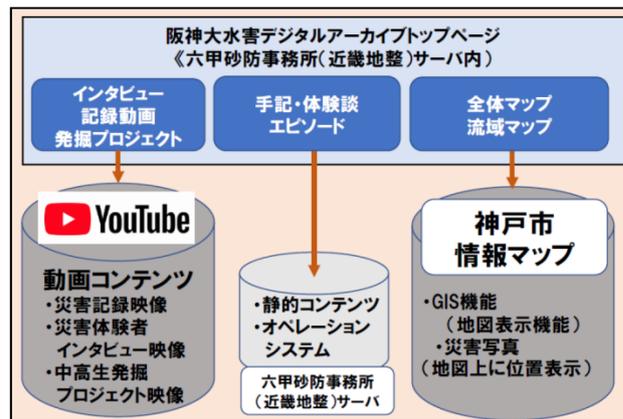


図4 デジタルアーカイブの構成

デジタルアーカイブの内容は以下のとおり。

- ・インタビュー
  - 阪神大水害の被災体験者の貴重な体験談をインタビュー形式で収録しており、5名の方の生々しい話から土砂災害の恐ろしさが伝わる。

・手記／体験談

被災写真とともに阪神大水害の被災体験者の体験談を掲載しており、当時の混乱した状況がよくわかる。

・エピソード

被災にまつわる挿話や当時発売されていた被災状況写真の絵はがき等貴重な資料を掲載している。

・マップ

被災写真で位置の特定ができたものを地図上に載せた。当時の地図と現在の地図の切り替えもでき、どんな被害がどのような場所で起こったかが明確にわかる。

・ムービー

被災当時の動画をナレーション付きで掲載している。静止画より当時の悲しさがよくわかる貴重な動画である。

・大水害の伝承

神戸市内の住吉中学校、渚中学校、神戸常盤女子高等学校の生徒の皆さんの阪神大水害の研究活動の内容やデジタルアーカイブ公開イベントでの発表等を動画で掲載している。中高生の視点からの研究となっており、同年代の方には是非観ていただきたい内容となっている。

**(3) デジタルアーカイブ公開イベント**

阪神大水害デジタルアーカイブを広く皆様に周知し、活用していただくため、公開イベントを平成30年11月24日に兵庫県看護協会ハーモニーホールにおいて実施した(写真6参照)。



写真6 イベント会場の様子

公開イベント内容は以下のとおり。

- ・「阪神大水害と近年の豪雨災害について」  
神戸大学 沖村孝名誉教授より阪神大水害や近年の災害の特徴、土砂災害の恐ろしさについての講演
- ・「私の体験した阪神大水害」  
実際に阪神大水害を体験された2名の方から当時の生々しい様子を司会者との対談形式で紹介
- ・「私たちが知ることのできた阪神大水害」  
住吉中学校、渚中学校、神戸常盤女子高校の生徒からの活動成果や活動を通じて想い感じたことの発表(写

真7参照)

- ・「阪神大水害デジタルアーカイブ その意義と活用に向けて」  
兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 浦川豪准教授よりデジタルアーカイブを作成した意義や今後の活用についての講演



写真7 中高生による研究発表

また別室で、この活動により収集できた資料の展示も行った(写真8参照)。



写真8 提供された資料の展示状況

**5. 今後の取り組み**

**(1) デジタルアーカイブの充実に向けて**

構築されたデジタルアーカイブは、引き続き関連資料を追加掲載していくこととしている。既に掲載した写真や書簡などの他、今後は阪神大水害の記録誌や書籍、現地に設置された石碑などの掲載にも取り組んでいきたい。

また、デジタルアーカイブで新たに加えた情報については、「新着情報」のコーナーを設けるなど使い勝手の面でも充実を図ることとしている。

**(2) 利用者ニーズを考慮した情報提供**

デジタルアーカイブの充実にあたっては、利用者ニーズを把握し、主な利用方法や利用者を考慮したデジタルアーカイブの改良にも取り組んでいく。

現段階で注目していきたいと考えている利用方法とし

ては、小中学校などの教育機関が防災教育を行う際に利用してもらうことである。まずは小中学校の先生方にご覧いただき、どのようにすれば防災教育に利用しやすいか等のご意見を反映した防災教育に利用しやすい使い勝手の良いツールに改良していきたい。

また、現在すでに自治体が情報提供しているハザードマップなどの防災情報とデジタルアーカイブを関連づけて閲覧できるようにできれば、防災情報をより現実感を持って理解してもらうことができると考えている。さらに、緊急時に提供される気象庁の気象情報や自治体から発令される避難情報なども関連づけられれば、避難行動を促す支援ツールとしても役立つと考える。現在のところ、神戸市ではデジタルアーカイブにリンクを張り、そのバナーを「土砂災害・水害に関する危険予想箇所（WEB版）」のバナーの隣に配置することにより、両方を参照してもらえるよう工夫している。引き続き、より利用しやすく、防災意識の向上に役立つ工夫を加えていきたい。

## 6. おわりに

デジタルアーカイブの公開イベントには休日にもかかわらず 370 名もの来場者があり、地域の方の関心の高さが確認出来た。また、講演・発表内容も好評を得、阪神大水害の記憶を後世に語り継ぐという第一歩を踏み出せたと確信している。

従来の広報活動の課題であった「より多くの人に自分自身のこととして防災を考えてもらう」ことについては、デジタルアーカイブという多数の方に観ていただけるツールの作成、より身近に感じられるような内容とする工夫を行ったことで、改善が図れたと考えている。

今回の取組で特徴的だったことは、六甲山地周辺の行政機関全体で取り組んだことである。それによって情報収集のための住民周知がより確実なものとなり、また、

成果を共有することで、成果が時間の経過により埋もれてしまうリスクが軽減された。情報の一元化にも寄与している。

また、学識経験者の参加により、行政だけでは思い付かないアイデアをいただき、より良いデジタルアーカイブの構成ができた。

そして、地元報道機関の参加により、住民等への広報手法はもとより、作成資料等のアドバイスをいただいた。

このように行政間の連携、有識者や地元報道機関等の協力で、それぞれの機関の得意分野への実力が最大限発揮され、相乗効果で今までにないようなデジタルアーカイブが完成した。

今回の取り組み自体は六甲山地周辺での事例であるが、1つの機関単独で取り組むのではなく、地域の産官学が一体となり取り組むというスタイルは、他の地域、他の機関にも参考となると考え、本研究発表会で報告した。

今後、本取り組みが参考となり、他機関連携によるより良い取り組みが行われることを期待したい。

### 阪神大水害デジタルアーカイブURL：

<https://www.kkr.mlit.go.jp/rokko/S13/index.php>

**謝辞：**本取組を共同で実施いただいた、兵庫県、神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市、神戸大学名誉教授 沖村先生、兵庫県立大学大学院減災復興対策研究科 浦川先生、人と防災未来センターリサーチフェロー 坪井先生、神戸新聞社、そして、今回貴重な資料や体験談をいただいた被災体験者及びそのご家族の皆様、阪神大水害の研究活動をしていただいた住吉中学校、渚中学校、神戸常盤女子高校の皆様へ深く感謝致します。

### 参考文献

- 1) 神戸市役所：神戸市水害誌，1939.
- 2) 六甲砂防工事事務所：六甲砂防六十年史，2001.